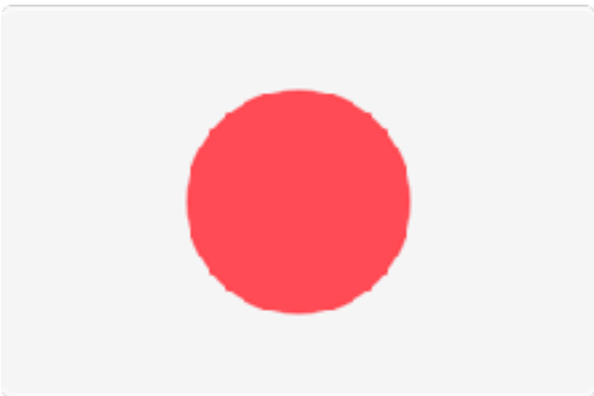
ブレーメン
大聖堂博物館

スマートフォン向けミニ
博物館案内



ハイライト

- 歴史的な織物（ミトラ（司教冠）など）
- リモージュの司教杖
- ブレーメン - 「北のローマ」
- 生きた伝統としてのボランティア活動
- ルーカス・クラーナハの絵画「悲しみの人」

はじめに

ようこそ大聖堂博物館へ!

はじめに

ブレーメン大聖堂博物館は、1970年代に行われた大聖堂の大修復工事に伴って設立されました。その過程で行われた大規模な発掘調査によって、大聖堂の1200年にわたる歴史に新たな知見が得られ、貴重な墓石を含む中世の墓が発見されたのです。14世紀と15世紀の別館の増築により、博物館に必要な部屋が加わりました。

はじめに

かつてここには、祭壇の隣に当時の大聖堂の財宝を収めた宝物庫、いわゆる「トレーゼカンマー」があり、その下には聖母マリア礼拝堂が（後期ロマネスク、15世紀初頭のフレスコ画）、そして隣接するゴシック様式の部屋には大聖堂の図書室がありました。宗教改革の後、これらの部屋は石炭やチョークの貯蔵という平凡な目的に使われるようになりました。1823年からは、いわゆる「鉛の地下室」がここにあります。（現在は、かつての回廊の下にあり、入り口は大聖堂の外側にあります - 見る価値あり！）

展示室1

壁画(フレスコ画)

展示室 1

大聖堂博物館に入ると、木製の橋に乗ったまま意外にも半円形の後陣の基礎が見えます。その直接の延長線は、はるか東にある大司教アダルベルトが建てた大聖堂の東側地下聖堂（クリプト）の外壁に続いています。（半円形2つ、円形1つのロマネスク様式の窓、11世紀後半、一部修復済み）

展示室1

ここは13世紀のロマネスク様式の部屋で、最後の修復作業中に汚れた漆喰の層からフレスコ画が発見されました。丁寧な発掘、整理、修復を経て、豊かな蔓の装飾と埋め込まれた天使の頭の下に、4つの絵が見えるようになりました。

展示室1

入口の柱間には、ヨルダン川でのキリストの洗礼、中央の対向面にはキリストのマントをめぐって戦う兵士たちと十字架からの降架、部屋の狭い壁にはマンドルラと呼ばれるアーモンド型の装飾の中にキリストが描写され、「マエスタス・ドミニ　(栄光のキリスト）」と呼ばれるものが描かれています。祭壇はここかつての聖母マリア礼拝堂にありました。

展示室 2

彫刻と柱頭

展示室 2

ここには、初期および後期ロマネスク様式の柱頭、台座、装飾品など、大聖堂から出土した石材の断片が展示されています。19世紀の再建の際に撤去されたものがここでまた展示されています。第二展示室の大きな窓の前には、1200年にわたる建築の歴史の流れが描かれています。

赤レンガの装飾のあるこの部屋には、かつては数多くあった美しい彫刻が現在少ないですが一部残されています。(1561年から1638年まで、大聖堂は閉鎖され、放置されていました。)

特に注目すべきは、「最後の晩餐」（15世紀初頭）、医師である聖コスマスとダミアンの生涯の場面を描いた彫刻、そして下の階段の前にある「マリアと幼いイエスを連れた聖アンナ」（1500年頃）です。

階段の吹き抜け

彫刻と紋章

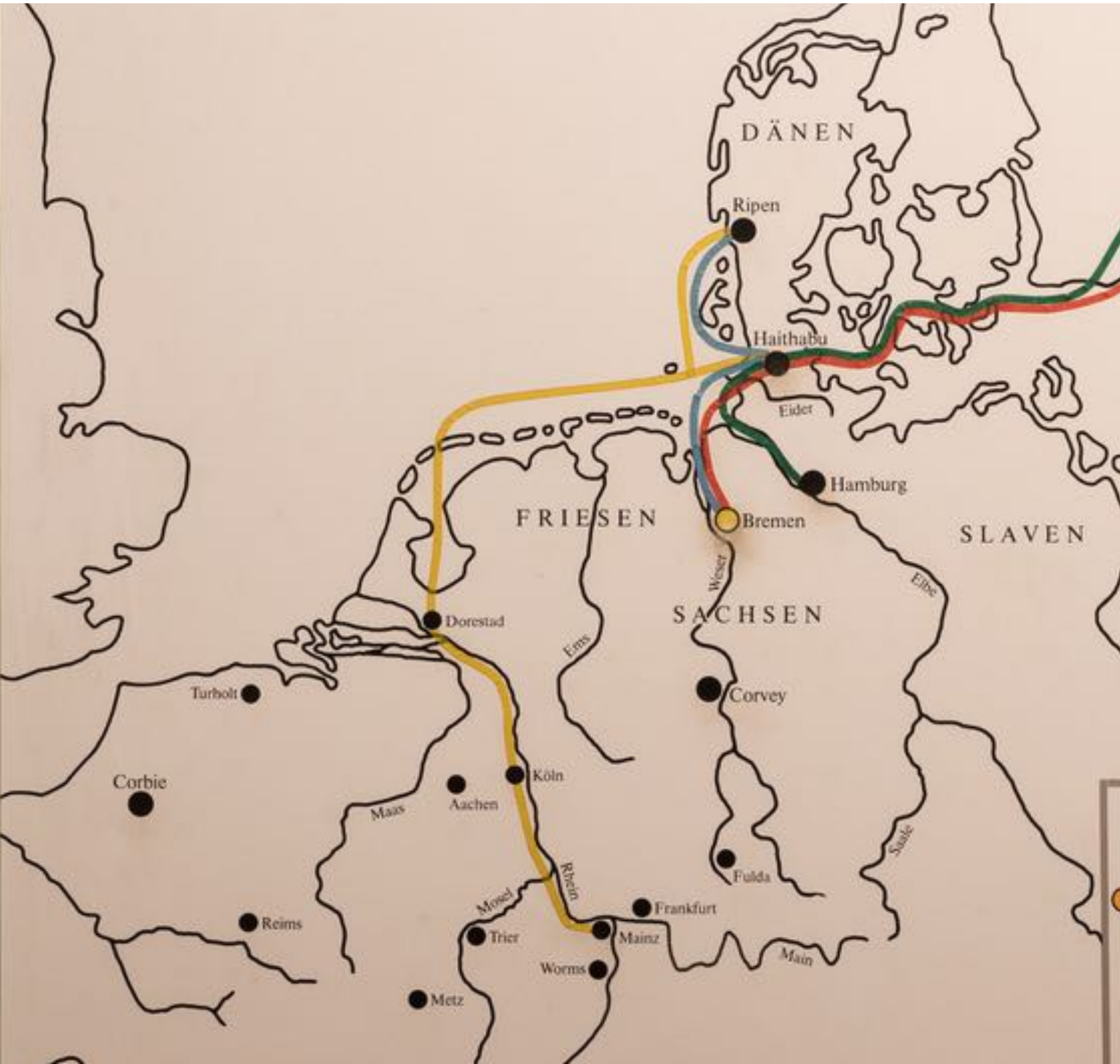
階段の吹き抜け

階段は、大聖堂博物館の上部の部屋に通じています。階段で足を止め、２つの初期の彫刻をご覧ください。「ライオンを引き裂くサムソン」と「狼フェンリス」これらは、いずれも11世紀後半の作品で、アダルベルトとリーマール司教の時代に計画された、大聖堂の旧西側ファサードのものと思われます。

階段の壁にある展示ケースには、中世の聖職者たちの紋章が展示されています。

展示室 3

銀の部屋「北のローマ」



展示室 3 - 「北のローマ」

1階の前室では、787年の設立から1648年の崩壊まで、ブレーメン司教区の歴史と意義を紹介しています。例えば、宣教師および聖人としてのブレーメンの司教たち（ヴィレハド、アンスガル、リムベルト、ウニ）、政治家および大司教としてのアダルバート、北欧への宣教拠点としてのブレーメン（「北のローマ」）、ブレーメンにおける中世初期の音楽、ブレーメン司教たちの文書や印章、宗教改革後の聖堂小区の歴史などがあげられるでしょう。

展示室 3 - 銀の部屋

中央には、1400年から1850年頃までの銀製の祭壇用具が展示されているのですが、これがまた素晴らしいのです。

展示室 4

第 1 織物室「宝物庫」

しかし、このコレクションのハイライトは数段下がった左隣の部屋にあります。11世紀から15世紀にかけての6つの司教の墓から出土した遺物は、光から保護された展示ケースに保管されているため、館内はかなり暗くなっています。冷房の効いた部屋への階段の前には、1410年から1420年頃の木製の司教像があり、かつての服装について説明があります。

展示室 4 – リモージュの司教杖

数ある貴重な品々の中でも、特に注目すべきはリモージュの司教杖です。そこには天使がマリアのもとにやってきて、彼女が神の子を宿すことを告げる様子が描かれています。神の受肉というクリスマスの奇跡が始まります。

（13世紀中頃、18号墓）

同様に印象的なのが、ここで紹介する法衣の一部です。これらの墓の出土品は、ストックホルムの「Riksantikvarieämbetet」という歴史的織物を扱う専門機関で洗浄、保存そして修復が行われました。豊富な織物の宝物の中から13世紀のミトラに注目してください。裏面は聖ペテロと聖パウロ、表面は天上のとりなし（ディセシス）、つまりマリアと洗礼者ヨハネの間に、世の中の審判者としてのキリストが描かれた珍しい物です。

本館から別館へ

キッズコーナー・写本

本館から別館へ

1995年春、ブレーメン大聖堂博物館は、大聖堂の大修復工事中に書庫に保管されていた美術品を追加し大幅に拡張されました。また、ストックホルムから戻ってきた中世の墳墓から発見され、専門的に保存されていた大量の織物を展示するための部屋も新たに用意されました。

本館から別館へ

銀食器のある部屋から、小さな階段を上って新しい部屋へ行くと、現在は募金箱として使われている美しい古い鉄の箱があります。右を向くと、ライトアップされた絵の壁があり、中世の写本が目に飛び込んできます。11世紀から15世紀にかけての羊皮紙に描かれた写本など、かつての大聖堂図書館のコレクションを印象づけるものです。

展示室61

ルーカス・クラーナハ作「悲しみの人」

展示室 6 – CRANACH

この部屋でまず目を引くのは、1537年頃に描かれたルーカス・クラーナハの「悲しみの人」で、十字架にかけられ復活したイエス・キリストが聖痕とともに描かれています。この種の絵画は、中世後期までさかのぼることができます。クラーナハの絵の横の壁には、カトリックの聖ヨハン教区から貸し出された歴史的な祭壇調度品や賛美歌集が、黒塗りのガラスケースに展示されています。このことは、この博物館のキリスト教的な性格を明確にしています。

展示室5

苦悩の物語

展示室 5

クラーナハの絵の後ろの小部屋には、イエスが鞭打たれ十字架に運ばれる様子を描いた他の絵が展示されています。これらの絵画的なテーマの描写は、時代とともに大きく変化しています。また、ここには聖セバスチャンの殉教の様子が大きく描かれています。

展示室 6 II

ボランティア活動

展示室 6Ⅱ－ボランティア活動

ブレーメンには、ボランティア活動の長い伝統があります。 横の壁にある展示ケースには、ブレーメンの3つの古いコミュニティから貸し出されたものが入っています。サンピエトロ大聖堂のディアコニア（1638年設立）、聖アンナ同胞団（1327年設立）、聖ヤコブ同胞団（13世紀にはサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼のサポートとして設立）などがあります。木製の聖ヤコブ像や、スパイスワインを作るための容器「シャワー」など、この地域の豊かな伝統を物語る芸術品が展示されています。

拡張された博物館の南棟には、もうひとつの大型絵画「Zinsgroschen（貢ぎ物）」が展示されています。フランドルの有名な画家、P・P・ルーベンス（1577-1640）の同名の作品を模写したものです。オリジナルはサンフランシスコに、もう1枚はルーブル美術館にあります。この2枚の絵に対してブレーメン版は鏡像なので、明らかに複製画からコピーされたことがわかります。

展示室 7

使徒、墓碑銘

展示室 7 – 使徒

この5体の木製の祭壇像は19世紀に制作されたもので、かつては聖堂の主祭壇にありましたが、現在は隣接する小部屋に置かれています。これらの像は中世の有名なニュルンベルクのセバルドゥスの墓に描かれた人物を見事に再現しており、使徒のパウロ、トマス、ヨハネ、マタイに加え、大聖堂の守護聖人である聖ペテロが描かれています。

ブレーメンの画家アルトゥール・フィッガー（1840-1909）による「キリストの嘆き」と「マギの礼拝」の2枚のスケッチです。完成した絵は、大聖堂の脇の礼拝堂で見ることができます。その隣には、1477年に亡くなった大聖堂総長ヨハン・ローデの墓の真鍮パネルがあり、中世の職人の素晴らしい技を見ることができます。このパネルは、中世の聖職者の法衣をよく表しており、死んだ司祭は当時の伝統に従った完全な礼服を身にまとって描かれています。

展示室 8

第２織物室

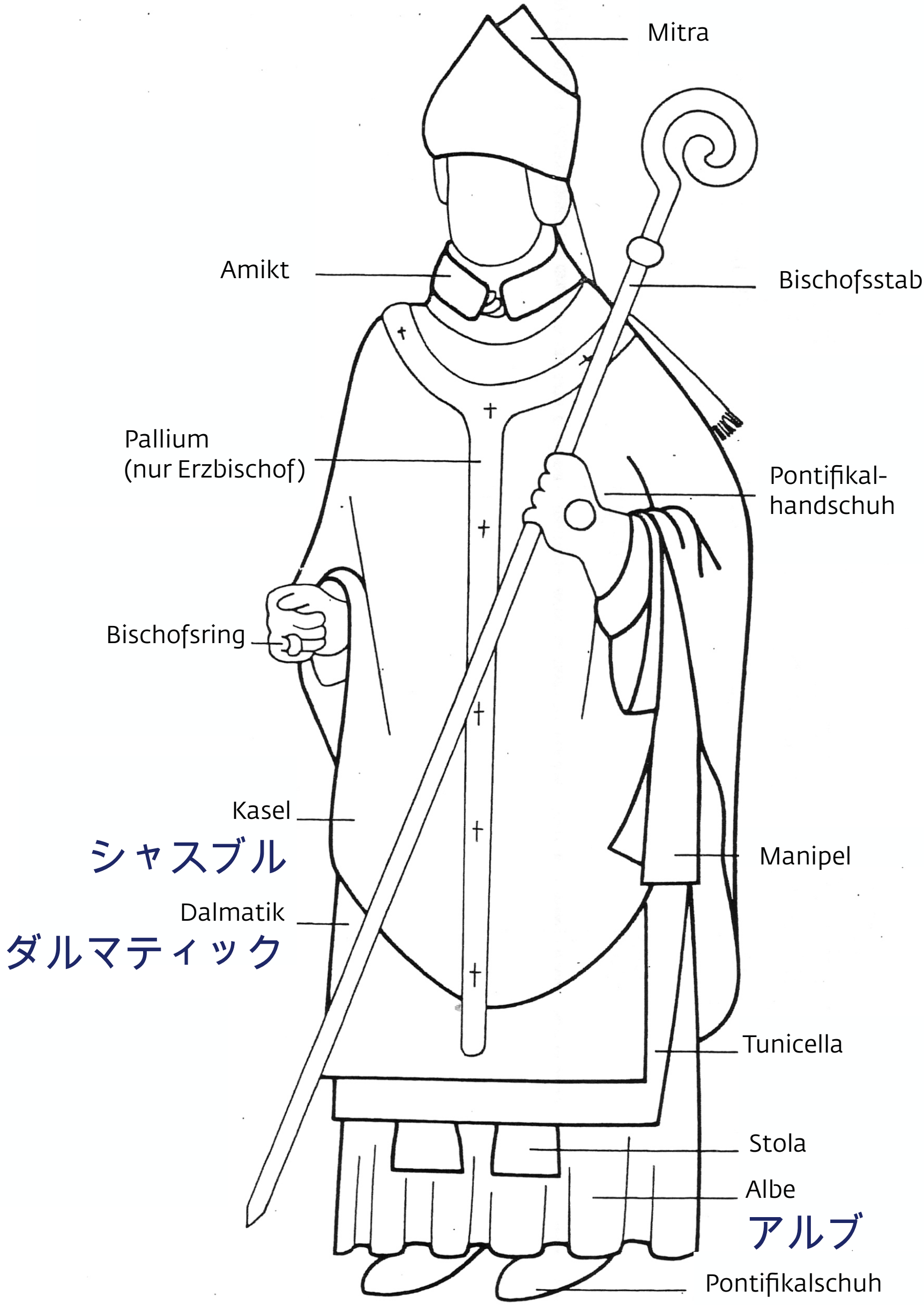
「全能のスルタン」

- ダルマティック
13世紀から

展示室 8 – 歴史的な織物

第2織物室には特に見応えがある展示物があります。この部屋は展示物が繊細なため調光と空調も必要で、7号墓の出土品は2つのショーケースに展示されています。大司教はチュニック、ダルマティック、シャスブルと呼ばれる3つの大きな法衣を身にまとっていました。

展示室 8 – 歴史的な織物


Mitra
Amikt
Bischofsstab
Pallium
(nur Erzbischof)
Pontifikal-
handschuh
Bischofsring
Kasel
シャスブル
Manipel
Dalmatik
ダルマティック
Tunicella
Stola
Albe
アルブ
Pontifikalschuh

特にダルマティックは、植物の装飾で見事な模様が描かれ、裾にはアラビア文字で「全能のスルタン」の文字が織り込まれており非常に注目されています。ストックホルムの織物専門機関の研究によると、ダルマティックは13世紀にムーア人の住むスペインで作られたといいます。それがブレーメンに届いたということは、ブレーメンの大司教座の重要性を証明しているでしょう。

シャスブルの隣には黄色い絹でできたミトラ、ダルマティックの左側にはアルブ（白いリネンでできた法衣、これ自体は現存しない）の2つのパリュールなど、大きな法衣に加え、小さな展示品もあります。その上には、二羽の鷲、ガゼル、ハヤブサ、そしてパルメットと呼ばれる植物の模様が描かれています。二羽の鷲の翼の上には、アラビア語で「成功は神からもたらされる」という文章が描かれた帯があります。

その中には、中央に聖なる子羊が描かれた手袋用の八角形の絹の刺繍が2つ、同じく刺繍で飾られた手袋のカフスが2つ、シュラウドクロス（死者を覆う布）の一部、故人の名前が書かれた鉛の板（残念ながら紛失）のためのシンプルなタフタ（布製）のケース、2つのブロンズ製のベルトのバックルも含まれています。保存されている織物は、研究や特別展示のために引き出しの中に大切に保管されています。

「新しい部屋」を出たら、「ブラームスの『ドイツ・レクイエム』-ブレーメン大聖堂での初演-」の写真展示を忘れずに見てください。1868年に行われたこのイベントは、当時の文章や写真でよく紹介されています。

Konzertarrangement: J. W. Haake, Obernstraße 22–24

Karfreitagskonzert des Domchors

am

29. März 1926, abends 8½ Uhr, in der St. Petri-Domkirche

Leitung: Professor Eduard Nößler

Bach: Kantate „Herr, wie du willt"
Brahms: Ein deutsches Requiem

Solisten: Else Buhrmann (Sopran) aus Hessenkirchen
Gerhard Hüsch (Bariton) aus Köln
Chor: Der Domchor
Orchester: Verstärktes Sinfonie-Orchester
Orgel: Wilhelm Lovis
Cembalo: Hermann Gerken

皆様のご支援をお願いいたします。

スマートフォンを使って、この場で簡単に、そして安全に寄付をすることができます。

http://twn.gl/bd

DOM MUSEUM BREMEN

© Stiftung Bremer Dom e.V. 2020, Text: Dr. Henrike Weyh, Übersetzung: Akiko Iida-Hassel, Fotos: Rita Stumper, Idee und Gestaltung: Dr. Till Pawelek